

北越雪譜

二編 四卷

越後 鈴木牧之編撰

天保辛丑新刻
書肆 文溪堂

京山人百樹增修

發販

江戸

京水百鶴畫圖

北越雪譜二編叙



北越雪譜六卷哉後塩澤鈴木牧之老人
雪窗園炫寒燠隱几隨筆其事出實脚
徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣
嚮者郵筒懇乞披正居之變刈蕪蔓披擲著
英先輯之卷以為初編告翁使書肆文溪堂刊布
之於後越者之奇予彙萬狀供即遊資錦室
婦妾市窓妻媿曰詳知越雪解士通人或云

九
2131

格致之助爰以聖譜之名頗踴躍於是乎書
得類乞嗣撰蓋以知吾孫稿在也余謂不踏越地
不可說越事仍丁酉之夏携乃兒京水越遊救
十日有紀行作再採數條刪補少弱之孫稿以爲二
編稿定將置序言有頃者晚春連日於晴紅酣
綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠
以療錐毛之痲矣夫成田山香火之盛世々所知也凡
自江戸到成田者抵小網街橋岸一貫搭船水路直

往行德都人皆以爲捷徑蓋行德一市會也不必成
田香火者搭船常並列于橋岸待行客是以俗呼
茲岸云行德河岸呼茲船云行德船余亦隨此
搭船其所供載者多是庸界雜沓穢衆口味
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許從一童偈
士可二十四五誇嘗輕俊殆似學究商半老樓幢
市樣相俱接膝余籍默不敢出一語凡屋漸變
茅葺櫻木厚雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫

頗水行之會心也。船既過，半途庸舟多就賦，
嘈々自羅窓之可悅，壯士出墨斗，持懷楸，竟旬果。
是書生也。老僧以鑿楚鏡披書士，閣筆曰：尊者所
孰是何書？僧曰：北越雪譜。士曰：僕嘗讀之，先固冊子
何足比閱？僧曰：貧老一錫，吾干北親，知越雪故，特購之。
供以續矣。今閱京山人序，彼少識字乎？士曰：否。不
夫京山者，文場之奴隸，藝苑之僮僕也。近年隨落
子，撰史院本之泥中，汚塗姓名，遂不能脫其窠窟。

強於彼自序。李漁金人瑞之流，亞文家爭洋
之年，僧哈然笑而不應。余佯睡，以之高已，婦曰：鄙人
書要也能識，刊行之趣。凡上梓之書，不編編輯之荒
誕，與詞章之奇雋，只以多璫為大著述。奉其作
者，為搖鈴樹翁，強感服顏士。抄書若其不吝唾
而不顧，是書梓之通義。曹耦之常態也。北越雪譜
初編之梓，一舉數百餘部，刷板裝本，至不暇給。
故二編刻，散免爰有近矣。士不然，其言猶在不止。

數輩頻啟傳手釋卷曰論說姑置足下歲京山
 年否士曰不識僧曰我十年前亦與彼會於一精
 舍僅得一面識不為無母緣言畢遽移拍余北月
 曰京山老人醒眠長兄忘我知余拙然不得應時
 船者行懷之岸舟中之人皆上岸不復繫叨吐歎
 于茲矣此夕然其言於逆旅燈下以爲序云

天保十一年庚子潔月

京山人石樹并書



北越雪譜二編凡例
 此書全部六卷收之老人之眠を驅の漫筆桿を俟ざるの稿本あり故小走
 墨亂寫一圖も亦中画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其駁
 雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一りの三卷書費の
 請小應り老人小告て桿を許し以世小布し小發敷一奉して七百餘部を
 鬻り是小依て書肆後編を乞ふ然ども余が机上宅の編筆小忙し屢稿を脱
 の期約を失ひ而も近且務て老人が稿本の殘冊を訂し以其乞小授く
 收之老人ハ越後の聞人あり嘗貞父朴實を以聞え屢縣監の廢賞を拜して氏
 の國稱を許し生計の餘暇風雅を以四方小交る余亡兄醒來別号翁も鴻書の
 友ありゆゑ余も亦是小嗣ぐ老人余小越遊を奨りて幸あり余固山水小耽の
 癖ありゆゑ小遊心勃たせども事小紛て果して丁酉の晩夏遂小豚見京水を從
 啓行を始り越後の諸勝を尽さんと思ひ越地小入後年稍侵して穀價貴踊

人心種るるをゆゑに越地を踐し僅小十がありあることども旅中於て耳
目を新しき一事を奉て此書小増修を百樹曰といふの是也

前編小載する三國嶺の圖ハ牧之老人ハ草画小倣て京山私儲満山小松樹を
画り余越遊の時三國嶺を踰し小此嶺ハさうあり前後の連岳をへく松を

見む此地小まゝも越後ハ松の少き國あり三國嶺を知り人ハ松を画しを笑ふ
也一是老人ハ本編の誤ハ非也京水ハ蛇足あり

山川村庄ハさうあり凡物の名の訓ハ清濁小より越後の里言ハたゞひするも
あつ然とも里言ハ多く俗訛あり今姑俗小从りあり本編ハ音訓の假名を

下さむかあつけハ余ハ必為あり謬を本編小驅こと勿き
余也固浅学ハて多く書不讀寒家ハて書小不富少く藏せも屢祝融小

奪て架上蕭然より依之増修の説小於て此事ハ彼書不見と覺も其書
を藏せざると急就の用小弁せも職痒もるか多し且浅学ハるハ引漏し

るも最まらるべし

本編雪の外他の事を載するハ雪譜の名を空する小似とことども姑記して好事の
話柄小具も増修の説も亦然り

雪の奇状奇事其大槩ハ初編小出せり猶軼事有を以此二編小記を已小初編小
載するも事の異ありハ不舎して之を録を盖刊本ハ流傳の廣きりのゆゑ初編を

讀む者の為小その意あり前後を讀人其層見重出を話こと勿き
釋の字釈小作の外澤を沢驛を馭小作ハ俗ありあるまじも卷中驛澤の字返

姑俗小从りて馭沢小作り以梓繫を省く餘の省字ハ皆古法小从ふ
卷中の画老人ハ稿本の拙画を真ハ或ハ京水ハ越地小写し真景或里人の話を

聞し圖小作りらるもあり其地小照して誤を責ることありと
老人編を嗣の意あり也也小初編二編とのハ前編後編といふこと

天保十一年庚子仲春

京山人百樹識

一之卷目録

- 越後の城下
- 雪の正月
- 雪中の戯場
- 輜の説
- 夏の雪
- 浦佐の堂叅
- 古哥ある旧蹟
- 玉栗。羽子擧
- 家内の氷柱
- 寒氣の力
- 削氷
- 雪の元日
- 雪吹小焼飯を賣
- 雪中の用具
- シガ
- 雪の多少

通計十六條

北越雪譜二編卷一



卷之一

越後塩澤 鈴木牧之編撰
江戸 京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ノ距リ一事國史小見の今ハ七郡を以テ一國トモ東小岩船郡古くは石小作蒲原郡新寫の湊此郡小屬す西小魚沼郡海小北小三嶋郡海小刈羽郡海小南小頸城郡海小古志郡海小以上七郡也城下ハ岩船郡小村上内藤侯蒲原郡小柴田溝口侯黒川柳沢侯三日市柳沢侯三嶋郡小与板井伊侯刈羽郡小推谷堀侯古志郡小長岡牧野頸城郡小高田榊一介侯糸魚川松平日向侯以上城下の外頗豊饒を爲す處魚沼郡小小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊。出雲崎刈羽郡小柏崎頸城郡小今町あり蒲原郡の新寫ハ北海第一の湊あり福地たり

夏論を俟む此餘の豊境ハ姑畧を此地皆十月より雪降るその深と
浅とハ地勢小より猶末小論せり

○古哥あゝ旧蹟

蒲原郡の伊弥彦山作夜伊弥彦社を當國第一の古跡とせ祭るところの

御神ハ饒速日命の御子天香語山命あり 元明天皇の和銅二年の垂

跡とせ社領此山さの高山ゆもあゝささども越後の海濱八十里の中やふ小

独立しん山脉りつきの山へもつうを右小國上山左小角田山を提攜して一

国の諸山是小對しん拱揖まゝささども山よりも見えて實小越後の

鎮ともあゝささ山は是よりわちあゝらとちもつささどもを命もる小垂

跡まゝしんここ此御神の縁起或ハ灵驗神宝の類記をささまあまゝこあま

とご姑ら小省○さて此山をよまゝる古哥小万葉「や日子のちの神まゝ

青雲のたふびぐ日まゝる小雨とやあゝるあまの又家持小「や彦の神のあゝる

小けりもらかのこやまゝんかそのまゝまゝつねつらゝ」▲長濱 頸城郡小

在り三島郡とせ家持の哥小「やまゝる雁のつまを休むてふここや名小

かふ浦の長濱」▲名立 同郡西濱小あり今宿の名小よふ 順徳院の

御製小承久のまゝ「都をささどもへ出し今宵もろた身名立の

月を見る哉」▲直江津 今の高田の海濱をいふ 同御製小「あけバ

聞きけバ都のこのまゝ此里をささ山やまゝ」▲越の湖 蒲原郡小濱

とよぶ処多し一里言小湖を濱とふその大あるを福嶋濱とふ四方三里計

此濱小遠くつびく五月雨山あり貫之の哥小「潮のつる越の湖近けと六拾

もまゝ「ゆゝま未ふり」又俊成卿小「恨もあゝるせんあまのこ越の湖

こるめあけまゝ」又為兼卿「年をへつり越の湖ハ五月雨山の森の岸」

▲柿崎 頸城郡小 親實聖人の詠玉ひここ碑小傳「哥小柿崎小

まゝく宿をのこり小主の心まゝるりあけり」按まゝる小聖人御名を

善信と中て三十五歳の時諱口小係りて越後小謫さる時小承元元年二月あり後五年を経て勅免ありて法を弘ん為とて越後小のまじしこと五年あり故小聖人の旧跡越地小残まり弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉あり越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年弘長二年十月廿八日遷化壽九十歳伴の柿崎の哥も弘法行脚の時の作あり

此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原のこも古哥ありとも他國小もつら名所ありて小越後ともさびあつて

さて今を去夏天保上子あり五百四十一年前永仁六年戌のこ藤原為兼卿佐渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君との遊女をゆ

玉ひ小初君の哥小のあひひる路の浦の白浪も立ちあつてありとこ七まけ此哥吉瑞とありてや五年たつてのち嘉元元年為兼卿飯浴あり九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君の伴の哥を入

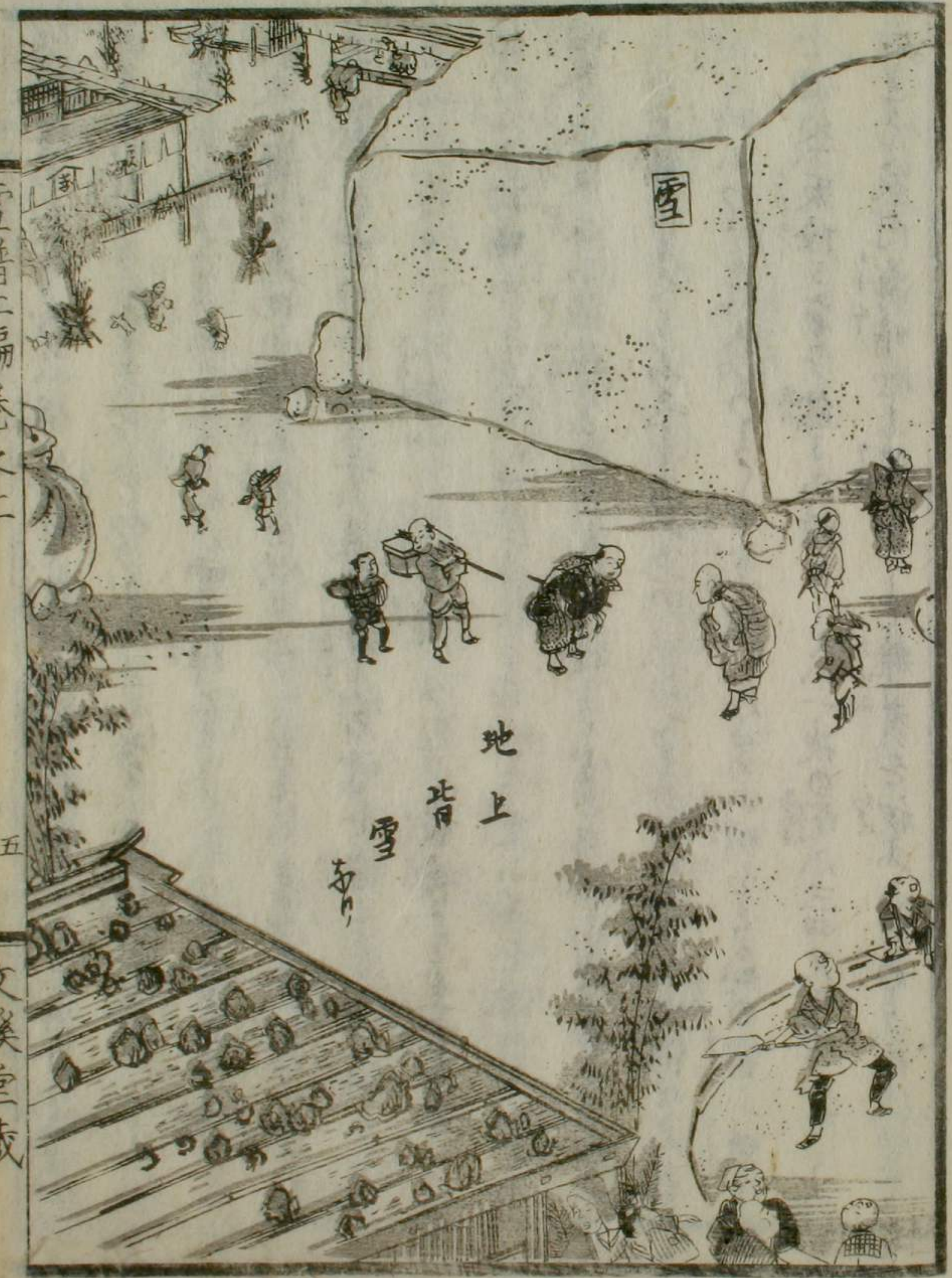
とらと玉あり是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷との貞享元年秋門万記との初君の哥の碑ありか浙破しを享和年間里人重修して今小存せり

○雪の元日

凡日本国中小於て第一雪の深き国ハ越後ありと古昔も今も人の事ありとて越後小於ても最雪のふること一丈二丈小ありて我住魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつり夏三郡小比も浅し是を以論を我住魚沼郡ハ日本第一小雪の深降所あり我その魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年の三四月のころ手小雪を視事已小六十余年近日此雪譜を作も雪小麓居のまじありとて我塩沢ハ江戸を去こと僅小五十五里あり直道を量ばあや近う雪のた時あり健足の人ハ四日あり江戸小

けりて其江戸の元日を聞かば縉紳朱門の更はあつて市中八千門
 万戸千歳の松をかざり直る御代の竹をたて太平の七五三を引さ
 るふ新年の賀客麻上下の肩をつつ往來をさふ万歳もうち
 まドの女太夫と鳥追ひの三味線ふめでたは哥をうたひ娘の児の
 やり羽子男の児の糸鷲見さりの聞のめだたさうふ初日影花や
 小さ一昇る實小新玉の春とこそいふげは其元日も此雪国の元日も
 同元日あるとも大都會の鶯花と邊鄙の雪中と光景の替り事
 雲泥のちがひあり。○そも我里の元日野も山も田圃も里も平一
 面の雪小埋り春を知りて庭前の梅柳の類も去年雪の降る秋の末
 小雪を厭う丸太を立く繩縛小遇さる雪の中小あり元日の春
 をあつてささる人も三四月小いささば梅花を不見翁が向ふ春も
 稍景色との月と梅と吟ぜり大都會の正月十五日ありま

山里万歳邊一梅の花と邊鄙の三月ある門松ハ雪の中一建
 七五三よりハ雪の軒小引りて禮者ハ木履をきて従者ハ藁靴あり
 雪徑小階級ある所小いささば主人もさうづつ小を記う此げさうづつハ
 礼者小うささる人々皆さうり雪全く消る夏のさうづつ小いささる草
 履をさう事あるささる元日の初日影も惟雪の銀世界を照その
 一ツとて春の景色を不見古哥小「花をの持らん人ハ山里の雪間の
 草の春を見せむや」とハ雪浅き都の事せり雪国の人ハ春小
 春をささるをのつて生涯を終ることをおぼへ繁榮豊腴の大都會
 小住さ羊さ歳々梅柳嬾色の春を樂む事實小天幸の人といふ
 ○雪の正月
 初編ふもいささ如く我國の雪ハ鷲毛をさる稀あり大くハ白砂を降る
 如く冬の雪ハささ小凝凍ささる春小いささる鉄石のごとく



行路中の正月積雪の圖



冬の雪のこわくさるハ濕氣あり乾る沙のごとくさるゆゑあり是暖国の
 雪小異処ありさるごとくさるゆゑありさるゆゑあり是暖国の
 春小ゆりても年小よりてハ雪の降こと冬ふかしくさるごとく積こと五
 六尺小過を天地小陽氣有を以てさるごとく春の雪ハ解るも中
 ちさるごとく雪のさるごとく年ハ春も屋上の雪を掘ことあり掘と木
 木中作りさる木鋤少土を掘ごとく取捨るを里言小雪を掘と
 しの已小初編少りりかやう小せさるごとく雪の重小屋を潰ゆゑありされハ
 旧冬の家毎小掘除さる雪と春降積さる雪と道路小山をさるごとく下小の
 らるを圖をえてもさるごとくさるの家も雪ハ家より高ゆゑ春を
 迎る時小りさるごとくさるゆゑ日先を引んさる小明をさる処の窗小透る雪
 を他処へ取除さるあり然る小時としてハ一夜の間小三四尺の雪小降るゆゑ
 らるごとく家内薄暗心も朦くとく雑糞を祝ふとあり飛後ハさるごとく

北国の人ハまづ雪の中ハ正月をさるハ毎年の事とさる正月ハ暖国
 の人ハ又さるごとくさるゆゑ

○玉粟

江戸の児曹ハ春の遊ハ女児ハ備球羽子擲男児ハ紙鴉を揚さるハ
 我國のごとくハ春小ありても前小りさるごとく地とて雪ありさる如き
 けさる歩行小苦路小遊をさる事少く玉粟とハ見戲
 あり春中ハ雪の始ハ雪を田成雑卵の大き小握りさる其上つて
 と雪を裁度もけさる足先踏堅あるハ柱小あてて壓堅ことを肥と
 しのさる手毬の大き小ありさる時他の童ガ作りさる玉粟を底下小置
 して我ガ玉粟を以他の玉粟小うらあつて強き玉粟弱き玉粟を碎くを
 りのさる勝負を争ふ此戲所小りて。コシボウ。コマ。地独樂。雪玉の
 りのさる小雪を。スゴ。玉ゴシヨ。勝合とさるゆゑ此玉粟を作さる雪小少く

塩を入るる堅あること石の如くゆゑ小兒互小塩を入るを禁むるありと
を以てする時ハ塩ハ物を堅むる物あり物を堅實小するゆゑ塩藏小を
ハ肉類も不腐朝夕嗽小塩の湯水を以てして歯をうらめし歯の命を
長くせしめ玉粟ハ見戯あること塩の物を堅むる證とす小たまり故小
あつ小記せり又量のあまじ小雪堂といふ夏あり初編小いせり

○羽子擢

我里俗を縁をつくとゆゑを
くまことゆゑらちをのこる

江戸小正月せ一人の話小市中ゆゑ見上るをより松竹を飾るゆゑ
美しく粧ひる娘ら彩る羽子板を持つ並び立る羽子をつくらぬゆゑ
ふも大江戸の春ありとぞ我里の羽子擢ハ邊鄙といひゆゑかゝる艶
姿小あつと正月ハ奴婢ども少ハ許さ遊をあましむるゆゑ羽子を擢
んとくまづ其処を見とて雪をうらめし角力場のごとく小あつ羽
子ハ渡琉を一すゆと筒切小あつこと小鶴雉の尾を三本さしゆゑ

江戸の羽子小比と甚大ありことを擢小雪を掘木鋤を用ふ力小まを
て擢ゆゑ小空小あつ夏甚高しゆゑ小大ある羽子のゆゑ小童ハま
らむあつとさする男女うちまづやとをきこつとつあど小と此戲をあを
ありつ羽子を並びとつてつゆゑ小あつあつ取捨するものハ始
小定ありとあつハ雪をうらめし又ハ頭より雪をあつとすその雪襟
懐小入りと冷小耐さるを大勢か笑ふ窓よりことを視るも雪中の一興
あり京傳翁ハ骨董集小上編下学集を引く羽子板ハ文化十二年
より三百七十年をうりの前文安のころありゆゑのゆゑとすより
あつと小あり一事ハ詳あるとすゆゑ又下学集小羽子板
小コゴイタと西かちをつけとすゆゑの子といふも羽子の夏ありとあり我
国も江戸の如く小兒女のをねをつく形もあり

○雪吹小焼飯を賣

塚山嶺雪吹圖



の雪
づつと
ま



まを〜甚〜橋を穿ゆ道遅く日も已小暮あんとて此時小い
 たり〜焼飯を賣する農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足をを
 め〜往農夫ハ屢後るゆゑ終ハ棄て独先の村小い〜あるの家小
 入り〜炉辺小身を温〜酒を酌始〜蘇生〜むひを〜けり
 〇さて志を〜あり〜と呼声遠〜聞るを家内の者き〜つけ
 け〜雪中の常とて雪吹倒とて扶と助けよと近隣の人をよ
 よび集め手毎小木鋤を持〜木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹たあとの
 あり〜大勢のみの一人の死骸を家の土間（昇入）をりの商人も立寄
 又且ハ最前焼飯を賣する農夫ありしとてその芋徳商人或時余が
 俳友の家小逗留の話小件の事を語り出〜彼時我六百の錢を惜
 焼飯を買せんハ雪吹の中小餓死せん〜の農夫が如くある〜今
 日の命も錢六百のうちあり〜と笑ひ〜と俳友が語り

○雪中の戲場

五穀豊熟〜羊の貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小過〜時
 氏神の祭あると遭〜を幸小地芝居を興行する夏あり役者ハ皆
 其処の素人あるハ近村近取より來るあり師匠ハ田舎芝居の
 役者を備ふ始小寺ある〜群居〜狂言をさ〜のちを〜の
 役を定む此群居の議論物〜と〜一度あり果〜事定
 り〜のち寺小於て替古を〜む技熟〜のち初日をさ〜衣裳
 のるハ是を借を一ツの業とせるものあり〜物の不足〜此芝居
 二三月の頃ある事あり此時ハ〜雪の消ぎる銀世界あり〜
 芝居を造る処此役者等が家ハ〜あり親類縁者朋友より人を
 出〜あるハ人を備ひ芝居小屋場の地所の雪を平ら〜踏か〜
 舞臺ハ花道樂屋棧敷のるを〜皆雪をあめてその形小〜

ありよく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りたる物天又人
 工をたぎけて一夜の間凍く鉄石の如く小なるゆゑいづれど大入りも
 さゞきの崩る氣づらひあり一弥生の頃ハ雪もや稀るる春色の空
 を見ると家毎小雪圍を取除くところありは処より雪かといひの丸太の
 るハ雪垂とく茅少く幅八九尺廣さ二間をりふつりたる簾を借
 あつめとくまての日覆とあるをふら花とらハ雪かして作りたる小板を
 あらざる此板も一夜のうち小氷つきつき釘付小まらるるも堅く暖
 国小比ま論の外あり物を賣茶屋をも作りつづるとの処も平一面の
 雪のまじり物を煮処ハ雪を窪め糠をちりちり火を焼ハ雪の解がる事
 妙あり○さて戯場の造作成就して春の雪ありつづき連日晴を
 見む興行の初日のびる時ハ役者ふありする家ハさう此ををを見ん
 とく諸方小返函の客多く毎日空をあらめて晴を待むバ客のゆゑ

あつてもあつて始倦果終ハ役者仲間いひあらせ川の氷を碎
 て水を浴干垢難く晴を祈るもをり

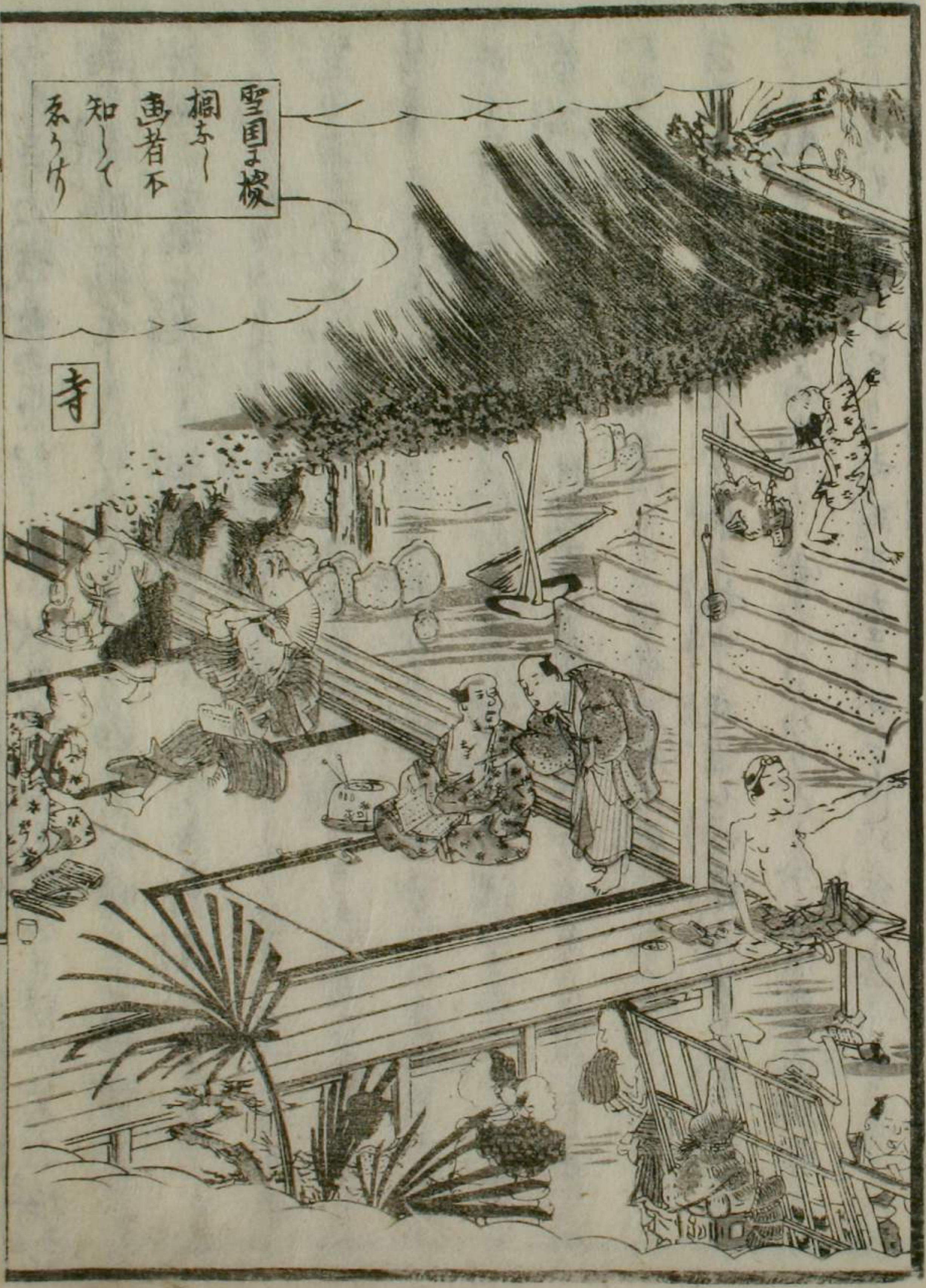
百樹曰余丁酉の夏北越小遊び塩沢小在一時近村小地芝
 居ありと聞て京水と俱小至り小寺の門の傍小杭を建て横
 小長き行燈あり是小題して曰當院屋根普請勸化の為本
 堂小於晴天七日の間芝居興行せむものあり名題ハ假名
 手本忠臣藏役人替名とありて役者の名多くハ寢名あり
 寺の門内ハ假店ありて物を賣り人群をあらを芝居ハ假小
 戸板を集り圍さる入り口ありて小守る者ありて一人前何程と
 價を取ると屋根普請の勸化あり本堂の上り段小舞臺を
 作り掛左ハ花道あり左右の棧敷ハ竹林簀薦張あり土間ハ
 薦を布筵をあつて旅の芝居大槩ハかくの如くと市川白猿が話

雪中演場を造る圖



地上
皆雪あり

聖国に松
桐あり
画者不
知く
るけり



寺

小もきぬ棧敷のらわしと云欲然やうな毛氈をけけらうふ彩色
 画の屏風をたてしけのをさあり四五人の婦より綿帽子をさ
 邊鄙小古風を失ざる観人群をありて大入ある猿の如き童ども樹
 木のわけてもあり小娘が笊を提ぎ氷とどぶと土間の中を賣る
 笊のあり木の青葉をさき雪の氷の塊をうると茶を賣つぎを氷
 を賣るの甚めづし氷のこと削氷の條ふらふとさて口上りひ
 出く寺へ寄進の物ありハ役者へ贈物餅酒のふ一人の名を
 奉品を呼ぶ披露一此処忠臣藏七段目をさまりといひ幕開
 ちかふ小折しハ岩井玉之丞とて田舎芝居の戯子あり一頗る美
 あり由良の助小折しハ余が旅中文雅を以識人あり年若ければ
 かる戯をもるをあらうと常ありらうと今の坂東彦三郎小似
 たり技も又観不足り寺岡平右門小ありしハ余が客舎小きては宛頭

ありことども常小かをりハ関三十郎小似て音声もまた天然と関三の
 如し余京水と相顧て感し京水たつと小イヨ尾張屋と誉けり尾
 張屋ハ関三の家号ある事通しぐさや尾張屋とやむりのひとらも
 ろ一幕あつとせし小守る者木戸をいさむを便所ハ寺の後小
 あり空腹あつバ弁當を買玉取次やさんといふ我のふあつ人
 又いさむ小人散ハ演場の蕭然を厭ふあつと出づる隙より折
 出所あつんと尋し小此寺の四方垣をめぐりて出づる隙より折
 ろ一童が外より垣をめぐりて入りてその穴より兩人入りてハ
 ことども又可笑しつとあり

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟よりも高く春ふありても家内薄暗さ
 めも高窓を埋る雪を掘のけり明をとるごと前ふりて如し此

屋上の雪ハ冬のうちまゝ掘のつゞ度々小木鋤こすきのつゞるるる屋
 上を損やぶむるまあり我國の屋上やねおやくる板葺いたづきあり屋根板ハ他国
 小比こひま厚あつく廣ひろく葺ふする上小筭木さんぎといふ物を作り添石そくを置おき
 鎮しづめ風を防かぎの便たすとてまゝあつ小雪をりのつゞるといふまはくま
 ことあつてその雪のうへ早春の雪ありつゞり凍こむる屋根のやぶ
 ことをあつて春も稍深やぶあるま雪も日あつて解とける焼火やきびの雪雪早
 く解とける小いづるかの屋根の損やぶする処木羽こたの下したをうづりあびて
 雪水漏ゆきずゆゑ夜中よな俄とに畳たたみをとりのけ桶鉢かきのつゞあつてをりを
 て漏もれをうづりぬる処を修治しゆぢとてまゝ小雪こゆき全ぜんくまゝえざるゆゑ手をうづり
 まゝあつて漏もれハ次第しだい小こやう座敷ざしきの内うち小こいづるまゝも大なる氷柱こを
 見みる時あり是こゝ暖国ぬくくにの人小こ足あしせとてせおひつゝ
 百樹もも曰い余われ越こ遊ゆてて大家おほやの造つくりやうを見みる小楹ことうの太おほく江戸えどの

土藏どそうのこと〜天井てんじやう高たかく欄間らんま大おほなりこと雪の時ゆきのとき明あをとる
 ところあり戸障と子骨こ太おほく〜手丈夫てぢゆうぶあつゆゑ國鴨柄くに鴨柄も廣ひろく
 厚あつく〜ま〜大材おほのまを用もち事目ことを駈かせりこと皆雪みなゆき小潰こつぶぎるの
 用心しんありとて江戸えどの町まち小い店下みせしたを越後えちご小雁木かづき叙いといふ雁木の
 下した廣ひろく〜〜小荷駄こにがたをも率ひへきやありことハ雪中ゆきなか小この底そこ
 下したを往來おうらいの為ためあり余われ越後えちごより江戸えどへへ時高田ときたかたの城下じやうげを通とほ
 へ〜北越きたえちご第一だいいちの市會いちかいあり高工軒たかこうけんをうづり百物備ももつちさ〜むと
 ぬり〜兩側りやうがわ一里いちり余あま成なり下したつゞりその中なかを往ゆこと甚いくく爽快くわいありき
 文墨ぶんがくの雅人みやびびとも多おほく〜ときが旅中りよちゆう年としの凶あやまる小遭飯家こぞういけを急いそぎ
 ゆゑ刺さを入いれまじりハ今いま小遺憾こいざんとて

○雪中歩行の用具

雪中歩行の具初編小其圖を出ししが製作を記さざりしに

その詳ありを示す

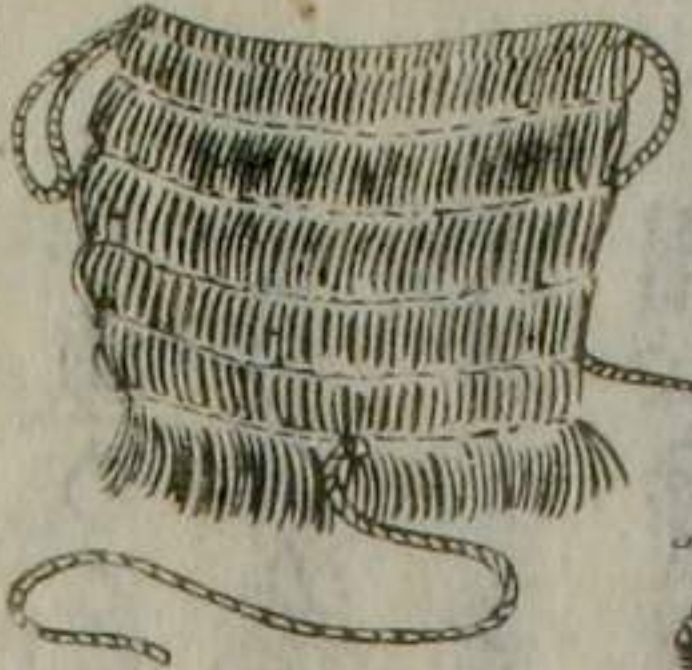
藁沓



深沓



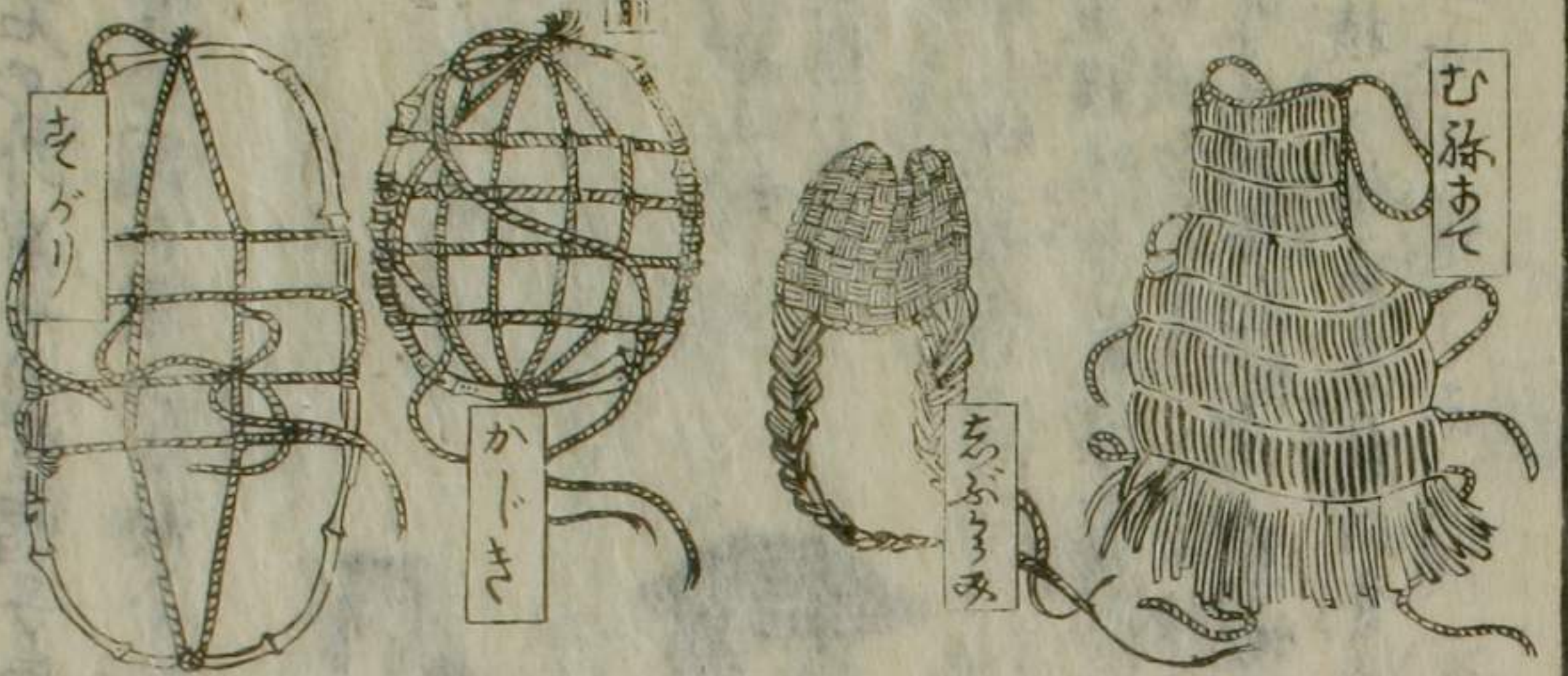
ハツハキ



○藁沓はたけふくすあまのちりあつきのものを九けく
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
すん中あつ結びとあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ

○足はらちりあつて作りあむ常の靴のまきをはきて雪
中小歩行して他の坐小つて時足をきくふあつて
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ

○ハツハキとあまのちりあつて作りあむ常の靴のまきをはきて雪
中小歩行して他の坐小つて時足をきくふあつて
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ



○シナ皮と深山小ある木の皮少く作る寸尺八身小
作寸六寸五分二尺三寸五分二尺五寸五分あり
り前より吹つて雪をあせぐたれ小用ふ農業ふ
常あも用ふ他国あもああり

○シブガラはあまのちりあつて作りあむ常の靴のまきをはきて雪
中小歩行して他の坐小つて時足をきくふあつて
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ

○せんぎの古訓あり里俗かきこりあつて一尺二寸
よと七寸五分分形圖の如くシヤガラといふ木の枝
作る鼻はあまのちりあつて作りあむ常の靴のまきをはきて雪
中小歩行して他の坐小つて時足をきくふあつて
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ

○まがりハなで二尺五六寸より三尺余横一尺二寸山行
をなだめて作る。かき。まがりの二つは冬の雪の
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを一筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを二筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを三筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを四筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを五筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを六筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを七筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを八筋ふけけつ
あまのちりあまふくすあまのちりあつきのものを九筋ふけけつ

右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具ありども薄雪の国小用なる物ふ似たりはる小省く



百樹曰余北越小遊びて牧之老人が家小在り時老人家僕小命て雪を漕形状を見せし京水傍小あり此圖を写り穿物ハ機。縫あり戲小穿てし一歩も進こあはるは家僕かあめは馬を御さるごとく

○ 轄

轄 字彙 禹王水を治り時載る物四ッあり水小舟陸小車泥小轄山小標註書徑 志るは此轄といふもの唐土の上古よりありぞく彼ハ泥行の用なるは雪中小用なるは製作異なるは轄の字美。絶。棧。秋馬諸書小散見を或ハ。雪車。雪舟の字を用ふる俗用あり

そもく此轄といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く且小作事最易きハ圖を見て知るは堀川百首兼昌の哥小初深雪降小けくまあはる山越の旅人轄小のるまにこの哥をのても我国小そりをつらふの古をあらはし前も志をくしるごとく我國の雪冬小凍さるゆゑ冬小轄をつらふ雪小もちりく撞とるら轄ハ春の雪鉄石のごとく凍さる正三三月の間小用ふべきもの

其時小いりを里俗輜道ふあり〜とのみ
俳諧の季寄小雪車を冬と暮るハ詠よりさまじくして雪中の物ありて
春の季ゆハ似氣あり〜古哥あも多るハ冬ふあり實ゆたふあり
冬〜と可あり

輜ハ作り易物也名わや〜農商家毎小是を貯ふさまじく載るものハ
より〜大小品々ありて作りやハ皆同ドやあり名も又あり
大あるを里俗小修羅と〜大石大木をのりあり

山々の喬木も春二月のころハ雪小埋り〜梢の雪ハ稍消て遠目あも
見ゆる〜此時薪を伐小易けきハ農人等あ〜輜を捲て山小入る或ハ
そりをハ麓小置もあり常ハ見上る高枝も埋り〜雪を天然の足
場〜と心の休小伐とり大く〜六把を一人中と暮るありさて下小三把
を並〜中ゆハ二把上ゆハ一把と暮るを繩や〜強〜傳〜麓小臨〜蹉跌小

凍る雪の上あり〜数百丈の高も一瞬の間ふあり〜小いりを輜小
のせ〜引〜或ハま〜山小九曲あり〜六件のごと〜小傳〜薪の
輜小乗り片足をあそびせ〜是ゆ〜楫をとり船を走ま〜と〜
難所を除〜数百丈の麓小〜一ツも過〜其術学〜
自然小得〜処奇〜妙〜あり

輜を引〜薪を伐〜と〜いあり〜行〜と〜三三人の食を草ゆ〜編
〜袋小い〜輜小〜〜と〜あり山鳥〜と〜をあり〜む〜
〜〜袋をや〜〜食を喰〜〜樵夫〜と〜をあり〜今日うせきの生業〜
〜と〜た〜〜や焼飯小せん〜と〜打〜見〜一粒もの〜
〜樹上小あり〜啼人ハむ〜鳥を睨〜詈り空肚をか〜
輜哥〜と〜輜をひ〜と〜事〜あり〜と〜その人の〜
そりをひ〜と〜と〜是を輜哥〜と〜と〜樵哥あり

唱哥の節も古雅なるものあり親あるひハ夫山ふり轄を引てく
小遠く轄哥をきて親夫のうをあり轄小遇処まむふの親夫
をバ轄小積る薪小跨せ妻や娘々をひきつ又轄哥を
うたうてくると質朴の古風今目前小存せり是繁花をさくさく幽
僻の地あるゆゑあり

春もや景色とのふらひ梅も柳も雪ふらぐのさく花も緑も
あつらふさくふと二月の空はふらふあをさく朗く
窓のゆき小書讀をりも遙小轄哥の聞ふらふも春めきえうは
是ハ我のふあさ雪国の人の人情ぞう

百樹曰我が幼年の頃ハ元日のあふより扇くと市中をうらあ
りく声あるひ白酒の声も春めきく心も朗ありく此声
今らう鳥追の声はさくあり武家のつぎさく町小遠所ふ

江鯨の鮓鯛のきとうる声今もあり春めくもの三月ハ
桜草うる声小花をひ五月ハ鯉く小白妙の垣根をさくふ
七夕の竹ヤハ心涼く師走の竹ヤハ竹あり聞小忙物皆
季小應トて声をう情小入る事天然の理あり胡笳の悲も又
然らん件ハ人の声ありまや春の鶯あるひ蛙夏の蟬秋
の初雁鹿虫の音又の水鶴をや本編轄哥をきて春めきえう
まうとい真境實事文客の至情あり我是小感トて小教言
を置く轄哥の春めくこと江戸人小あひもよる奇情あり
こと小似らる事猶諸国小あぶ

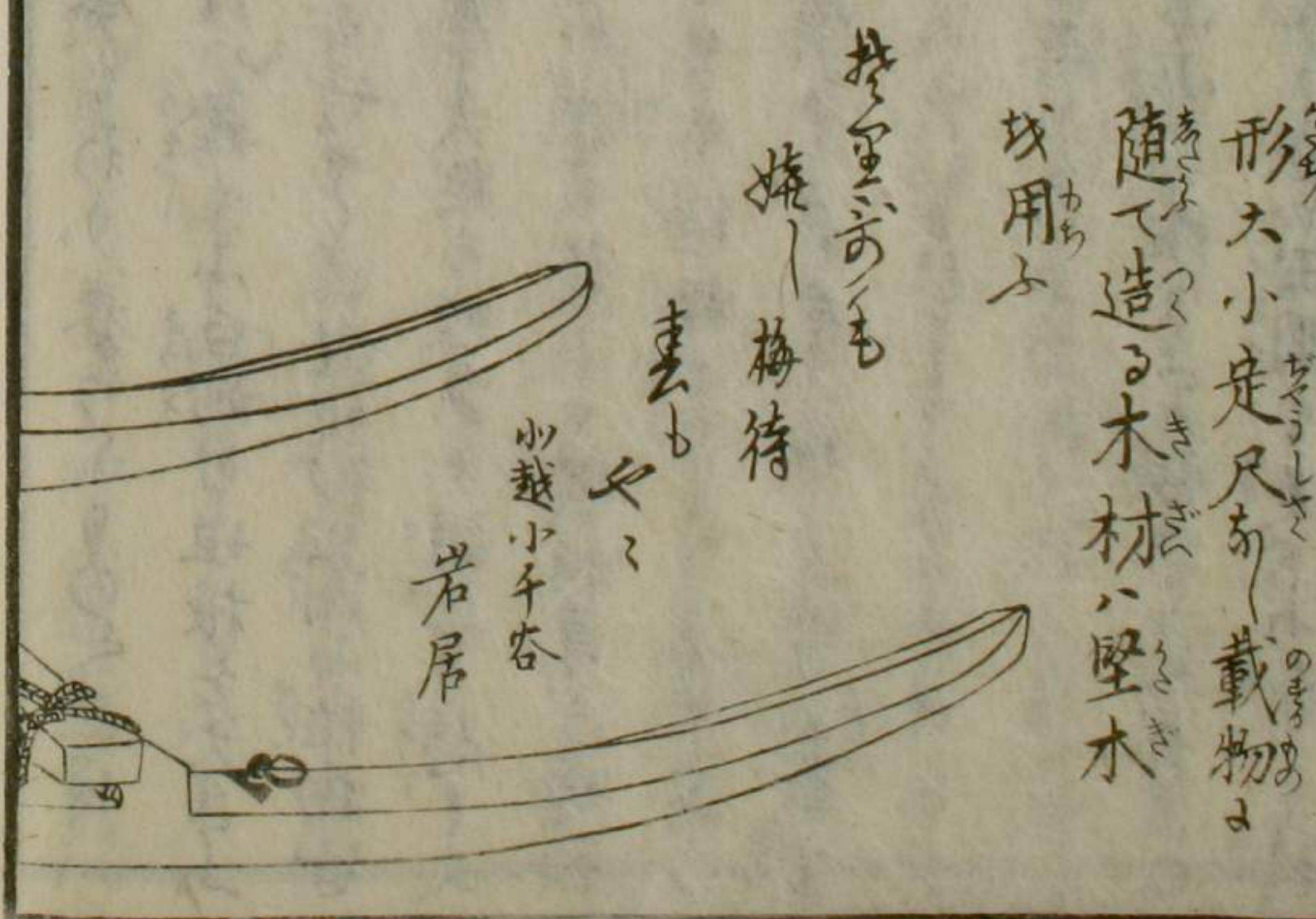
糞をのせる轄ありことそのなるや小く作り物あり二三月の
ころも地と雪ありさくあく渺くさく田圃も是下小在り持
分の境もさくふらうらうらさくあるふかの糞のそりを引てく小来り

秋月庵牧之草



兒童垂氷を
轆のせ大持の
つら

轆全図



形大小是尺あり載物
随て造る木材ハ堅木
以用ふ

梅待
まも

小越小千谷
若居

まを
学をして
時ハ去り



雪のゆくふ一點の目標もなき小雪を掘こと井を掘が如く小く糞を
入る不我田の坪ふらる事一尺をもあやむる事こそ我が農奴等も
事あり荒くする雪上何を目的小くかくいさる事と問ひ小目あて
する事ハあつて心小くせとちの坪ふらる事ありとい
り所為ハ賤けまごも藝術の極意も小あつてまごもあつて
こ小あつて初学の人藝小進の一端を示す

輻の大あるを里言小修羅といふ事前小といふこと大材木あつてハ
大石をのせとひくを大持といひとせ京都本願寺御普請の時末口
五尺あつり長さ十丈あつりの楳を抱一事のりさかゝる時ハ修羅を
二も三もかゝるあり材木ハ雪のふらる秋伐りてそのま山中小あつて
輻を用ふる時小いりてひきいさる大材をも抱をもつて雪の堅さを
あつて田圃も平一面の雪あつてひくべき所直道小ひきゆゆ甚

舟あり修羅小大綱をつけ左右小枝綱ゆきまごもありまごも
本願寺御用木といふ職を二本持つ信心の老若男女童等まごも賤の
如くあつまりとこをひく木や音頭取五七人花やうる色木綿の衣
類小彩帯の魔抹て材木の上ふありと木やをうらふその哥の二ッ小
テラうさだて児鬼が耳ハあぜあつて母の胎内小く時小笹の葉
をのまごも耳があつて大持がうらんど花の都りなりた
り百人「いとう」そのこゑたまにひいて「いとう」
同音小「いとう」そのこゑたまにひいて「いとう」
児曹ら手遊の輻もあり氷柱の六七尺もあるをとり小のせて大持
の学びをう木やをうらひ引あるまで戯まあそぶるど暖国あ
あつて聞もせざる事あつて猶輻小種々の話あつてもさ
らとせり

○春寒の力

春ふりては寒氣地中より氷結あぐるその力礎をあげて椽を
反しあふひ踏石をも持あぐる冬ふりては寒むるともかゝる事あり
さむべこと雪も春へ凍り輔をもつふあま屋根の雪を掘りけつと
上ぐあぐを里言ふ掘揚とらふ前あり往來の路も掘あげありと山
をるもゆゑ春雪のこりふりてさむべあまの雪の山小箱換のごとく階を
作りて往來のたよりとともさうの所らつとふもあまゆゑ小下踏の齒小
釘をあらく打て蹉跌さるゝ為とを唐土ゆゑは是を標とて山小のびる小
まづさる履とを標和訓カシキとあり

○シガ

冬春ふりては雪の氣物ふらぎて霜のむきよるやふあま是を里言ふ
シガとの小戸障子の隙より雪の氣入りて坐敷シガをあらす時あり
此シガ朝暾の温氣をうらるゝ処の解とあつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪ふらぶるも梢ハ雪の消る小シガのつきよるハ玉りて作り
よる枝のやうく見事あまのあり川辺あまをさうく者ふ髪髪の毛
ふもシガのつく事あり此シガ我が塩沢塩沢ふらまきありあま郡の中
小出嶋あまふら多一大河小近きゆゑ水氣の霜とあまゆゑあま

○初夏の雪

我国の雪里地ハ三月のころふりては次第次第に消朝ハ凍と鉄石の
如くあまごも日中ハ上より下よりもきよる月末ふりては目あま
るやふ小昨日今日と雪の丈け低くありゆゑ雪も降まると雪圃とら
りて取のけ家のやうに庭あまの雪をも掘りつる小雪凍りて堅きゆゑ
雪を大鋸大鋸ゆゑ大鋸大鋸の里言ふひきとりてまつるとの四角ある雪を脊負ひ
あふひ擔持擔持ふらるゝと暖国の雪とハ大小異り雪小枝を折るとと杉
丸太をとりてあまをりてけあまきよる庭樹あまも解りてけハあまをふ梅と

雪の中ふ蒼をふくむ春待くわありこと春の末あり此時ふりて去
 年十月以來暗くり坐敷もやうく明くありて盲人の眼のひくま
 する心地せしむ難はるごとく桃の節供の名のまはる花はまじりて
 あり四月ふりて田圃の雪も斑ふきえり去年秋の彼岸ふ時さる野
 菜のる雪の下ふ崩れを梅の盛をまじり桃櫻ハ夏を春とを雪ふ
 埋りたる泉水を掘いざる去年初雪より以來二百日あまり黒闇の水
 のあふありし金魚鯉鯉あんどろきりげふ浮泳も言やきりうや
 とらふべし五月ふりて人も人の手をつけざる日蔭の雪ハ依然とて山を
 あせり況や山林幽谷の雪ハ三伏の暑中ふも消ざる所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏豚見京水を従て北越ふ遊し時三國
 嶺を踰し六月十五日ありふ谷の底ふ鶯をききて

足の中ふ雪を聞く我もまじり谷の底ふ鶯の山ふ
 拙作のことも實境ある記を此嶺らもて四里山徑隆崎
 数武も平坦の路を踐む浅貝といふ駅宿り猶二居嶺ニテを越
 て三侯といふ山駅宿り芝原嶺を下り湯沢小抵んとする途ゆて
 遙小一楹の茶店を見る底のゆふ床ありて浅き箱やうのものふ
 白く方ある物を置たる遠目ふこと石花菜を賣あらん口あの上
 ぞとむのひらぐも山をさる暑もさけ汗もまじり小足も
 つらむて茶店あるがうもて京水とゆふもてやりの腰を
 うけかの白き物を見まじりてんむあて雪の氷ありけり六
 月小氷をさる事江戸の目あ最珍しけりて下りて熱視バ
 深さ五寸計の箱小氷をのこその中小小き踏石やどの雪の氷を
 おきたり賣茶箱小向バて山蔭の谷ふありありなまじり

ちりめんといふはさへもひらきく菊菜刀を把盜のあつさり
 と音と削りし豆の粉をうけしり氷小黄の粉をうけし
 る江戸の目小見も慣を可笑けき京水と相目く笑をさのひ
 つは八價をさへて今もさへて豆の粉をうけざるをさへて
 掛小用意しる砂糖をうけし削氷小齒もさへてさへり暑を
 さへて珍しき事さへてさへり

そもくこのけり氷といふ物を珍味とさる事古書小散見せ
 その中小定家郷の明月記小曰「元久二年七月廿八日途より和
 哥所小参る家隆朝臣唐櫃二合を取寄らる。破子。凡。土器
 酒等あり又寒氷あり自刀を取り氷を削る奥小入る事甚し」
 本書ハ件ハの元久二年乙丑より今天保十一年まで凡六百三十余年を
 漢文と歴て古人の如く削氷を越後の山村小賞味しる事珍とさへり

奇きこと一實小好古の肝を清くは

○按小ひとの氷の本訓とわりと訓ハ寒凝の美ありと士清翁和
 訓棗小つり氷室といふ事俳諧の季寄といふものありとゆもえ
 といふ普人の知りたる事さへ周禮ありてさへ唐土のむりゆも
 ありしことあり 御国ハ仁徳紀小見えさへてその古きをさる

づ延喜式小山城国葛城郡小氷室五ヶ所をいざせり六月朔日
 氷室より氷をいづる朝庭小貢献をるを諸臣も領賜事
 年毎の例ありあり前小引明月記の寒氷ハ朝庭より
 の古例の賜ありありいづる朝庭小貢献をるを諸臣も領賜事
 七月廿八日あり六月朔日ありさる氷七月廿八日を消さる
 づ明月記ハ千字百幕の書ありて七六の語とさへ氷室を
 出し六月の氷朝を待てを蓋貢献の後氷室守が私不出を



六月賣雪圖



あつては氷室と厚氷を山蔭などの極陰の地中小藏
 置屋を作りつけ守らる古哥ゆもよめる氷室守是あり其
 氷室ハ水の氷成をさめかくす小諸書の注記も見え一ツ水の
 氷もろく不潔なり不潔をゆつて貢献せらるるす且水の氷ハ
 地中小存りても消易ものあり是他あり一水ハ極陰の物ありゆ
 陽小感ト易ゆゆあり我越後小削氷を視て思小かの谷間小
 在といひハ天然の氷室ありむの氷室といふ雪の氷りむろ
 ある一極陰の地小竅を作り屋を造り掛別小清淨の地小垣を
 めらるる人小踏せを鳥獸ゆも穢さを雪而雪を待雪ふも
 此地の雪をかの竅小撞こり埋り人は是を守り六月朔是を閉最
 清淨ある所を貢献せらるるん歎是已ハ臆断を以て理小就て古
 の氷室を解するあり

○氷室の古哥枚拳つてむかの削氷を賞味一玉ひつる定家小
 拾遺愚州 夏あが秋風ならぬ氷室山とよむ冬とこのこととむ

又源の仲正小 千載集 下とある氷室の山のおを櫻まことのりつる
 雪とて見よこの哥氷室山のおを櫻を消残りつる雪小見とる

一首の意氷室ハ雪の氷あるべむかむらる今加州候毎年六月朔日
 雪を献ト玉も雪の氷ありことゆても古の氷室ハ雪の氷あるを
 おのづかひの茶店ゆ雪の氷をめぐりてむひ小その
 次日より塩沢の牧之老人が家小在ハ小日毎小氷とよびて賣末る
 山家の老婆あどあり掌やどあるを三錢小うるもがらハ二三度賞味
 せしがのちハ氷ともむらるるを物の得とてハ珍らるる
 得易ハめぐりて人情的の恆あり塩沢小居る六月の氷の
 めづりつるをむらる吉野の人ハ一の花ともむらるる松

鳥の人ハ松鳥の月もあつたまどらうらまでも飽ざる物の孝心
あつた我子の類と藏置黄金の光あつた

○雪の多少

越後国南ハ上州小隣^{上州}魚沼郡あり東ハ奥州羽州^{奥州}隣^隣蒲原郡^{蒲原郡}岩船
郡あり国堺ハいづとも連山波濤をあらまぬ雪多ク東北ハ鼠ヶ岡^{鼠ヶ岡}岩船
出羽の西ハ市振^{市振}越中^{越中}の堺^堺小至^{小至}の道八十里之間都々北の海濱あり海気小よ
りて雪一丈ふいふぞ鮮少あり又消も早ク頸城郡の高田ハ海を去事
遠くとも雪深ク文化のそと大雪の時高田の市中^町雪小
埋り^{埋り}闇夜のごとく昼夜をまぐる事十余日市中燈の油尽て諸人難
美せ^{美せ}小御領主より家毎小油を賜ひ^{賜ひ}事あり此時我塩沢も大
雪ふく夜昼をまぐる家雪ふくづまり日光を見ざる事十四五日^{連日}
家づまり^{家づまり}人々鬱悶^{鬱悶}と病をあらまぬ事ありけり

百樹曰余牧之老人が此書の稿本小就て増修の説を添上梓の
為小傭書^{傭書}授一本を作るをり^{をり}老人が寄る書中小
當年ハ雪遅く冬至小成ても^{成ても}駅中の雪一尺小^小此日^{此日}六
今年ハ小雪あんと諸人一統悦び居^居所小廿四日^{廿四日}黄昏より
降い^{降い}廿五六七八九日まで五日の間昼夜小^小事^事一丈
四五尺小^小おび申^{おび申}毎年の事あつた不意の大雪ふく廿七日
より廿九日まで駅中家毎の雪掘^掘混雜^{混雜}簷外急玉
山を築^築戶外^{戶外}いづれ^{いづれ}惘^惘申^申今日も又大雪吹^吹小相成家内
暗く^{暗く}蠟燭^{蠟燭}小^小此状をま^まり申^{り申}何程可降^{可降}哉難計^{難計}一同心
痛^痛居申^{居申}下畧 是當年^{天保十一年}十一月廿九日出の尺翰あり
此文をりても越後の雪を知^知余越後の夏小遇^遇小五
穀蔬果の生育少^少雪を畏^畏る色多^多山景野色も雪あ



春の梢
雪の消えるのち
再び雪の
降る景

雪景二編

九七

文英堂



佐浦詣堂押圖

雪景二編

文英堂

りしとわらわらるる雪の浅き他国不同し五雜紐小部百草雪を畏
むし霜を畏る蓋雪ハ雲小生し陽位也霜ハ露小生し陰
位也とつり越後の夏を視て謝肇淩が此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方二宿越六町浦佐との宿ありらる普光
寺との真言あり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳るゆ此堂大同二
年の造営ありとを修復の度毎棟札あり今猶歴然と存る毘沙門の
御丈三尺五六寸往古椿沢といふ村小椿の大樹ありしを伐て尊像を作り
しとを作名ハ傳らざるときは像材椿をのりて此地椿を薪とをま
るゝも祟ありゆゑ小椿を植て又尊灵鳥を捕を忌玉ふゆゑ小諸鳥
寺内小群をありし人を怖む此地の人鳥を捕ありハ喰ハ立所小神
罰ありたとい遠郷ハ聳娘小ゆきと年を歴ても鳥を喰を必凶應

あり灵験の照くる事此一を以て知るべし遠郷近邑信仰の
人多しむりより此毘沙門堂小於て毎年正月三日の夜小限り
堂押との事あり敢祭式の礼格とをる小ありむりより有末
たる神事あり正月三日ハより雪道ありとも十里廿里より来りて
此浦佐一宿一此堂押小遇人もあはば近村ハゆゑもさるあり
○さて押小来りし男女まづ普光寺小入りし衣服を脱了身小持する物も
もてり小置棄婦人ハ浴衣小細帯まも小をたもあり男ハ皆裸あり
燈火を點てるころの七間四面の堂小ゆゑ裸の男女推入りし錐をた
つゝの地より余も若かりしころ一度此堂押小あひりか上へあげし手
を下へさぐる事もあつぎるやど小逼り立けり押との誰ともさるサン
ヨウくと大音小呼りし声の下小堂内小充滿する老若男女ヲサイ
コウサイとよをりて北より南へとくくと押又よをりて西より東へ

甚奇あり七間四面の堂の内小裸ある人々ありてあげさる手もあらず
 事ありぬわどあまふ人の多さをうりあさる此諸人の氣息正月三日の
 寒氣あま烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことふ為小暗く人の
 氣息屋根うらふ露とあり雨のごとく小降人氣破風よりりりて雲
 のさのぢるが如く婦人稀少小児を背中小むをびつけく押し有さる
 かの小児啼あともあれも常とさるの不思議あり況此堂押小いさうも
 怪取をうけける者むり一人もあらず婦人のあまふ湯具をうり
 あるもあまふ闇処小噪雜一人もあらずかゆき事をせずこと
 かの毘沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸ある初以人氣少く堂内
 の熱さること燃がごとくあまふ願望小よりて一里二里の所より正
 月三日の雪中寒氣肌を射がごときを厭む柱のごとき氷柱を裸身小

脊負て堂押小さるるもあり二たか三たか小いさるる人々も
 熱こと暑中のごときゆゑ堂のやう小ある大ある石の盥盤小入りく水を
 浴び又押小入るもあり一ト押小く息をさむ七押七踊あつ止を定とす
 踊といふも桶の中小半を洗ふがごとくゆゑ小人々満身小汗をあがけ
 第七をとり目小いさるる普光寺の山長耕夫の長をいふ手小筋を持人の手輦小乘
 て人のあまふ入り大音小いさるる毘沙門さぬの御前小黒雲が降とモウ
 衆人「あんどとくさるる」モウ「山男」衆「あつとくさるる」モウ「とさるるをさるり
 あり此此きら内」摺ハ凶作ありと外ととさるる又志願の者兼て
 普光寺へ達しきく小桶小神酒を入と盃を添て献て山男挑燈をりたせ
 人をわたりさるる者サ人をうりさるる小堂小入る此盃手小入る幸
 ありさるる人の儔をうり取んとし神酒ハ神小供さる状と人小
 散一盃ハ人の中へ擲ることを得る人ハ宮を造りて祭る其家あつた

おもむきなる幸福あり此よりらんをも争ひ奪ふ小なる事破るその骨一
 本よりとも田の水口よりむけこの水のかゝる田ハ熟實虫のつく事あり
 神具のあつた事あり神く人の知る所あり神事をらむ人々離散
 一々普光寺小入り初葉置る衣類懐中物を視る小鼻糸一枚小失
 る事あり掠まば即座小神罰あるゆゑあり。さて堂内人散れ後々の
 山長堂内小葺幹をらじむく夏例あり翌朝山長神酒供物を備ふ後
 さぬ小進捧ぐ正面小をむを神の忌ぬふと昨夜ちりりもきり葺幹す折
 小折あり是人散てのち諸神々小集り踊玉ふゆゑを踏をり
 玉ふありとらひつゝ神事ハをぐ見戯小似ること多しある事ども凡慮
 を以て量識づゝを此堂押小類せし事他國ふもあつた姑記して類
 を示す



北越雪譜二編卷之一終

